

藤本蚕業歴史館

史料目録

藤本工業株式会社

本資料は、印刷媒体からデジタル化(PDF 化)したデータをベース
にさらにテキストコード化・PDF 化したものです。

テキストコード化：長野大学 前川道博研究室 2022 年 1 月 16 日

はじめに 会社沿革

藤本工業の原点は幕末明治初頭、長野県大総代として蚕種業界で活躍した藤本善右衛門縄葛にさかのぼります。その時の繁栄を受け継いで、1908（明治41）年、藤本蚕業合名会社が設立されました。新会社発足にあたって作られた『蚕種営業案内』には「藤本蚕業合名会社設立趣意書」が掲載されていて、その社員には、佐藤善右衛門・八郎右衛門・尾之七・平作の名前が書かれています。また、「追白」として、この会社設立を機会に、藤本善右衛門をやめて本姓の佐藤善右衛門に復するとも書いています。こうして、成立した藤本蚕業合名会社は1924（大正13）年に藤本蚕業株式会社へと組織変更しました。これ以後も蚕種製造販売で活躍しましたが、1941（昭和16）年の戦時統制期に入ると、藤本蚕業株式会社は日本蚕糸製造株式会社の傘下に入って同社藤本蚕種製造所となりました。藤本蚕業株式会社は藤本蚕種製造所に生産施設を賃貸することになりました。

戦後、統制が撤廃されると、上田小県で蚕種製造施設を持つのは藤本蚕業（株）のみになりました。そこで、地区内の蚕種業者が参加して、上田蚕種協同組合が発足しました。蚕種製造場所は藤本でした。しかし、藤本は1951（昭和26）年、同協同組合から離脱独立して、藤本蚕業株式会社の生産施設を賃貸して藤本蚕種株式会社を設立しました。さらに、藤本蚕業（株）は1958（昭和33）年プラスチックの製造を開始し、1962（昭和37）年3月には、藤本蚕業株式会社から藤本工業株式会社へ社名を変更しました。藤本蚕種（株）は1966（昭和41）年、上田蚕種（協）に再加入し、蚕種製造を廃止しました。

藤本工業（株）は、現在藤本蚕業（株）以来の土地・建物を管理・賃貸しています。藤本蚕業合名・株式会社および藤本蚕種株式会社さらには佐藤本家から寄贈された蚕種製造関係史料を、現業に携わった佐藤一助・勇二両氏が健在のうちに整理したいと思い、上田小県近現代史研究会にお願いして目録を作成していただきました。この度、保存する史料を各方面でご活用いただければと存じ、この目録を発刊することにしました。

なお、歴史館としたのは、文書・図書・雑誌・物資料を所蔵公開するため、文書館・博物館ではどちらも不十分との研究会のご助言によります。

2009（平成21）年9月

藤本工業株式会社代表取締役 佐藤圭司謹白

目次

はじめに

1 目次	3
2 史料解説	5
3 藤本本家近世史料	
(1)史料一覧表	19
(2)史料目録	21
4 藤本本家近代史料	
(1)史料一覧表	67
(2)史料目録	70
5 藤本蚕業（蚕種）合名（株式）会社関係史料	
(1) 史料一覧表	117
(2) 史料目録	
① 戦前編	
製造部	126
販売部	140
会計経理	149
分場部	160
その他	169
② 戦後編	
製造部	175
販売部	205
会計経理	228
分場部	242
その他	247
③ 一紙文書	265
6 藤本蚕業（蚕種）合名（株式）会社蒐集文献史料	
(1) 史料一覧表	299
(2) 史料目録	
蚕糸業行政機関史料（国） A	305
蚕糸業行政機関史料（県） B	312
蚕糸業関係史料（企業） C	318
蚕糸業関係史料（団体） D	330
蚕糸業関係史料（研究会） E	357
上田 小県蚕糸業関係史料 F	363

県内蚕糸業関係資料（機関、団体、会社） G	376
蚕糸業関係以外の会社（県内外） H	390
銀行関係史料（県内外） I	393
書籍等（蚕糸業関係） J	397
書籍（蚕糸業関係外） K	410
新聞・通信・時報 その他 L	433
商報・月報 M	444
名簿・時刻表・電話帳・配達区域録等 N	448
カタログ・パンフレット	451
7 佐藤隆一家保存文献史料	
(1)史料一覧表	457
(2)史料目録	459

藤本蚕業関係史料目録

史料解説

千曲川の洪水常襲地帯である塩尻村は水田農業が適していない代わりに、千曲川が洪水と共に運んでくる佐久地方の肥沃な森林褐色土壌によって、全国屈指の桑園栽培適地となった。塩尻村ではこの桑園を活用する養蚕が古くから栄え、やがて蚕種製造の本場として全国に名を馳せるようになった。幕末明治初頭に、ヨーロッパの蚕糸業が微粒子病の蔓延に苦しみ、病気に強い蚕種を日本に求めてきた。塩尻村の藤本善右衛門は病気に強い「青白種」を製造していたが、この情勢に乗って「青白種」は海を渡ってフランス・イタリアに大量に輸出された。このおかげで、わずか10年前後であるが、上田藩領内の蚕種業者は未曾有の繁栄を誇るようになった。ヨーロッパへの輸出が途絶した後も、この地方の蚕種は日本全国へ販売され、21世紀に入った今日まで続いている。

その中心となったのが塩尻村の藤本蚕業（蚕種）合名（株式）会社であり、廃業した後もその関係史料は保存されて、今日に至っている。私たち上田小県近現代史研究会は、2003年8月から保存された史料の整理を進め、2009年9月に目録作成に辿りついた。その途中で、藤本本家関係史料や茨城県土浦関係史料も合流して、戦国期から1970年代までの、また、営業所として栄えた土浦関係も含む一大史料群となった。ここに、目録を発行し、世の利用に供する次第である。この目録には以下に記す4種類の史料が含まれている。

- 1 藤本本家関係史料（近世分 近代分）
- 2 藤本蚕業合名会社から藤本蚕種株式会社までの史料
- 3 上記会社が蒐集してきた図書・雑誌・紀要・新聞
- 4 その後、収集された土浦関係史料

である。そこで、簡単に上記史料の内容を記して、使用の便宜を図りたい。

1 藤本本家関係史料近世分

担当 小野和英

(1) 藤本本家関係史料について

藤本家関連史料の主要なものは上田市立博物館（佐藤尾之七文書）や佐藤隆一氏（佐藤平作家）宅など複数の場所に存在し、本家にはその残りが残されたと思われる。佐藤隆一氏によると、文書には藤本善右衛門の名前が書かれているところから本家が火災にあったとき、分家である佐藤隆一氏宅へ文書類を持ってきたのではないかとのことである。

また、藤本善右衛門縄葛（つなね）が収集したと伝えられる国学、歌学などの和本類6千余冊は「藤盧文庫」として上田市立図書館に保管されている。

(2) 藤本本家の史料整理

藤本家の史料は土蔵の修理にあわせて搬出され、土蔵のすぐ脇に造られたプレハブの倉庫の棚三段に44箱が詰め込まれていた。近世分を小野和英が、近代分を桂木恵が整理を行うとして始めたのであるが、箱は藤本家当主がまとめた箱もあれば、搬出の際とりあえず段ボールに詰められた様な状態のものまで様々であった。また、時代も文書形態 内容もばらばらのものが多く、近世分、近代分が多く入った箱をおおざっぱに分け、整理を開始した。その後、本家入口の別の土蔵から近世 近代史料などがまとまって発見され併せて整理を行った。

(3) 整理方針

できるだけ文書が保存された状態を目録にとるため、こよりなどでまとめられた史料群は仮番をつけ、枝番1、枝番2と枝番処理を行った。文書に記載された年月日を正確にとり、西暦を加え、文書の年代に幅がある場合年代終わりも記載した。

表題は文書の表に書かれているものを採り、記載がされていなかったり、記載されていても「覚」など内容が表題のみでは判断できないものはかっこ内に内容の一部を要約して目録に採った。文書作成者、宛所は目録利用者の利便を考え記載した。一紙ものは「通」、横帳、縦帳は「帳」という単位をつけた。備考には、文書の特徴、袋などの有無、こよりの状態など、記録して残して置いた方がよいと思われる情報は記載した。

(4) 分類方針

近世分と、近代分は文書の性格がかなり違うため、近世については『長野県史』の分類を参考に大分類を

領地、土地、農業、貢租 課役、町と村、蚕種 養蚕、諸産業、流通経済、林業、交通、災害、騒動、家、その他、雑に分けた。

近代分は蚕種製造や経営、博覧会といった史料が多くを占めるようになったので大分類は養蚕、博覧会、持株、土地、家、村政、雑とし、中分類、小分類でさらに分類を行った。

近世分と近代分の史料群の内容、性格がかなり異なるため、目録の作成は別立てとし、史料の配架も別とした。

(5) 近世史料の特徴

藤本家は代々上塩尻村で中心的な役割を果たした家であるが、前述したように藤本家史料が複数カ所に保存されている関係から、本家に残された史料のうち村政に関するものの多くは上田市立博物館に寄贈されているため、意外にも少ない。史料は、家にまつわる私文書が中心を占める。

① 実物資料

土蔵にあった古文書の箱には、養蚕書を板刻した板木が含まれていた。天保12年(1841)に藤本善右衛門保右(やすすけ)によって著された『蚕かひの学』の板木8点である。出版が終わった板木は著者のもとに戻されたため残されたものと思われる。

- ② 1689 年から 1935 年までの伊勢暦（または略本暦）がほぼそろっている。略本暦とは、一般向けに小型にして日常生活に必要な項目だけを記載した暦である。
- ③ 家に関する史料では、葬儀などの記録である音信帳が目につく。
- ④ 宗教関係では、檀那寺である耕雲寺（坂城町南条）の修復などに関わる史料や上塩尻の神社である座摩神社修復に関わる史料がある。他には月牌や普請に関わる史料として高野山金剛峯寺、虚空蔵菩薩、上諏訪宮などの寺社の名前がある。
- ⑤ 農業関係では上田藩の特徴である「田畑貫文帳」や「田畑切起改帳」など僅かであるが存在する。
- ⑥ 蚕種・養蚕関係では、蚕種販売についての取り決め、蚕種の半取についての訴訟記事、蚕種の取引についての書状などをみる。

近代以降は蚕種関係の史料が多くなるのであるが、近世では少ない。また、系統的に歴史事情を追っていこうとしても、村に関するもの、家に関するものなど雑多な内容の史料のため、他の史料で補って歴史構築を行う必要があろう。

2 藤本本家史料近代分

担当 桂木恵

はじめに

当初、プレハブ倉庫に仮保管してあった史料と、後に別の土蔵から出てきた史料のうち、近代分と推定されるものを、桂木が整理した。しかし、年代が特定されるものばかりではなく、十二支だけの年号や月日だけの記載しかないもの、全く年代の記述の無い物も多く、あくまでも内容から推定せざるを得なかった。また、点数としては僅かだが、幕末から明治7年頃にかけて編まれた議定書類は、終年を考慮して近代に入れた。以上のことから、一応近代に分類してあるが、今後精査に再調査すると、近世分に入れた方がよい物も含まれている懸念がある。史料の中でも、際だって多いのが書簡類である。その数、900 通近い。多くが封筒ごと無造作に束ねてあった。また、便箋など中身がむき出しのものもあった。こうした書簡は、あまりに膨大で、また時間の制約もあり、加えて多くが私信と推定されたため、内容は採っていない。ただ、その中には差出人が三吉米熊など著名人の物もあるので、今後再度調査の必要があると思われるものもある。

(1) A 養蚕・蚕種関係

藤本本家は、国内でも有数の蚕種家であった。そのため、養蚕・蚕種関係の文書は多い。時期的には、1908（明治41）年、藤本本家を含む佐藤一族は、親類縁者を糾合して、藤本蚕業合名会社が発足するが、明治5年頃からその頃までのものが多い。

明治以降の蚕種製造は技術革新に続く技術革新の時代であったが、それらを如実に示すべく、気象や給桑、蚕品種や掛け合わせなどの製造データを示す記録が『養蚕日記』などの

タイトルで残されている。微粒子病などの病害対策や桑栽培の記録もある。

蚕種販売は、近代的経営が定着してからも種場という近世的な販売方法を採用していたが、その実態を示す史料の他、郵便制度が発展するにしたがって徐々に全国へ販路を拡大している様子が伺える書簡による注文書も残されている。

蚕種に関する法令や会社の定款などもある。とりわけ代々善右衛門を襲名した藤本家の中でも、幕末から明治にかけて大活躍した縄葛については、彼が拝命した蚕事大総代関係の文書は貴重と思われる。また、明治初めの同業者による販売組織である妙びょう連や均業社、千隈会社などの組織の性格を知る上で欠かせない定款もある。その他、雇員名簿や出勤簿、給与などの労務関係の史料もある。

明治政府は、「富国強兵」策を進める根本として、国を挙げての養蚕や製糸の振興に取り組んだが、その具体化の一つが、博覧会や各地の共進会であった。これらへの出品目録などの史料も残されている。当然と言えば当然かも知れないが、養蚕に加えて、製糸についての史料もある。諸外国の製糸製造状況を知るための海外視察の復命書もあった。

代々善右衛門を襲名してきた藤本家は、祖先を顕彰するために書かれたと思われる沿革史（標題はない）もある。縄葛やその長男、信汎については、履歴について書かれたものもある。

(2) B 金融・株式・土地

幕末から明治以降、蚕種製造を拡大させていく藤本家やそれに続く藤本蚕業合名、さらにはそれに続く藤本蚕種株式会社は、蚕種で売り上げた利益のかなりの部分を株式投資や土地集積に充てたと思われる。

この地方最大の銀行であった十九銀行や六十三銀行、長野農工銀行や信濃銀行の株の他、東京電灯や東武鉄道など中央資本の株も目に付く。土地では、土地台帳や地券などの土地所有を示す物や小作管理関係の書類も多い。水車や借家、借地も保有していたことを示すものもある。借用証書や貸付台帳など、小口の金融を営んでいたことを示すものもあった。こうしたことから、藤本合名（藤本蚕種）の資産は、かなりの額にのぼっていたと思われる。明治末から昭和初めの大恐慌まで、わが国の中小資本家は幾度と無く危機を迎えるが、それを戦後まで乗り切ることができたのは、蚕種販売だけに頼らない、こうした資本の蓄積の証左ともいえる。その他、ここには同業者で組織した「講」も入れた。

(3) C 家・村政

家に関わる史料で目に付くのが、大量の領収証の束である。これらは、多いものでは数百通が一括りの束にしてあった。内容的には、全く個人の家計に属するものもあれば蚕種経営に関するものも混ざっていたが、保存されていた状態を優先するため、敢えて分類せず、そのまま袋に入れてある。生活実態を知る上で貴重な通い帳もあった。

縄葛から三代にわたる善右衛門の出納帳も貴重であろう。『日記帳』『座右録』という標題であるが、内容は金銭の出納記録である。残念なことに、保存状態が良くなかったため、虫食いや貼り付きがひどく、中身を見ることができないものが多い。検討できたものは少ない

が、近代的な会社経営以前の個人的な記録であるため、蚕種経営に関するものと全くの個人的な家計簿的な内容が一冊の簿冊に混在しているのが特徴である。

預貯金や保険、財産目録などは、財産の項にまとめた。

建築については、普請という項目を設けた。ここには、家や門などの建築に関する図面や手間、材料運搬に関する史料を入れた。

藤本家は、他の蚕種業者がそうであるように座間神社と深い関わりがあった。また、旦那寺は耕雲寺であった。それらに関わる史料は、宗教の項目に入れた。

その他「家」には、冠婚葬祭に関する史料も多数ある。地方の素封家の生活実態を知る上で貴重と思われる。ただし、史料によっては生々しいものもあり、親族の感情に考慮して非公開が妥当と思われるものもある。

ここには、「教養」という分類も設けた。縄葛といえば、藤盧文庫や続錦雑誌があまりに有名であるが、そこから漏れたと思われる歌集も数多く残されている。家督を譲った後、縄葛自身に関わったと思われる。また、事件や騒擾などの記録（写し）や天皇陵の調査などもあり、縄葛の知的好奇心や関心の幅広さを伺わせる。

村政については、山論や選挙などに関するものがあるが、数は多くない。国政や県政に関するものもあるが、ごく僅かである。ここで興味を惹くのは、塩尻学校に関する資料である。明治政府は、学制をスタートさせるに当たり、地方名望家の財力や指導力に期待したが、塩尻学校では縄葛の長男である信汎がその任にあたった。そのため、会計簿や学資金寄付金名簿や生徒名簿などが残されている。信汎が学校設立に関わっていたことは、今年現地での開校百周年を迎える塩尻小学校に残されている史料からも明らかにされている。

(4) もの

実物史料は、「もの」とした。各種記念の徽章や会員証、教典、鑑札、藤本の罫のある版木、経文、などがある。

(5) その他

断簡も分類できるものは整理したが、全く分類不能のものもあった。

以上の通りであるが、先述したように書簡類を中心に、まだ不十分なものもある。私信の中にも、重要な内容を含んでいるものがある可能性もある。現時点で目録は作成するが、再度検討したい。

3 藤本蚕業合名会社設立から藤本蚕種株式会社廃業までの史料

担当 新津新生 白澤治雄 富田隆順

この史料群は 1908（明治 41）年に設立された藤本蚕業合名会社以後、藤本蚕種株式会社が廃業する 1966（昭和 41）年までの 62 年間の史料から成る。藤本とは佐藤の本家という意

味で蚕種製造を業としていた。寛文年中(1660 年代)、佐藤善右衛門が蚕種製造を創始して、以後約 250 年を経て 1908 (明治 41)年 3 月、佐藤善右衛門・同尾之七・同八郎右衛門・平作の蚕種業を合同して設立したのが藤本蚕業合名会社であった。この時作成した「藤本蚕種合名会社設立趣意書」には、「追白」として、「社員善右衛門は本姓佐藤にして、同族の宗家たり。故ありて屋号藤本を姓とし今日に至りしも本社の設立を機として本姓に復し自今佐藤善右衛門と称し、世の記憶に存せる藤本の名は取て以て弊社の冠むらしむることとせり」とある。

その後、1924 (大正 13)年には藤本蚕業株式会社と株式組織に改組し、戦時中には大日本蚕糸株式会社に合併して同藤本製造所となり、戦後は独立して 1951 (昭和 26)年に藤本蚕種株式会社となった。以後、廃業するまでこの社名で営業した。また、世界恐慌後の不兼気対策として、保険業務も行っていたため、その史料も含まれている。また、史料整理がほぼ終わった頃に、本家の史料や土浦営業所からの史料が持ち込まれた。これらは、目録の各中分類の終わりに本家分は補遺、土浦分は(T)として付け加えられている。

約 60 年に及ぶ史料を、便宜上と会社の生産販売の仕組みの変化とから、戦前 A と戦後 B に大分し、さらにそれらを製造・販売・会計・分場・その他及び一紙文書に分けて、整理を進めた。以下簡単に分類一覧について記す。詳しくは分類一覧表をご覧ください。

(1) 戦前分

I 製造部～原種関係、蚕種製造、蚕種整理、検査 免許関係、種繭 養蚕関係、蚕種統制期、その他

II 販売・営業部～蚕種注文引受関係、販売伝票関係、蚕種販売台帳関係、販売調査関係、蚕種代金関係、保険関係

III 会計経理関係～帳簿、伝票、統制関係、その他

IV 分場関係～長野県、千葉県、全国その他の県

V その他～庶務関係、受信発信関係、勤務関係、図書雑誌関係、その他

(2) 戦後分

I 製造部～原種関係、蚕種製造、蚕種整理、検査関係、種繭 養蚕関係、その他

II 販売 営業部～蚕種注文引受関係、蚕種受渡伝票関係、蚕種販売台帳集計関係、販売調査 予想 営業関係、蚕種代金関係、出張所関係 (群馬 埼玉 茨城県)、保険関係

III 会計経理関係～帳簿、伝票、税金 保険関係、その他

IV 分場関係～長野県分場製造、販売、経費資材、分場、その他

V その他～庶務関係、受信発信関係、勤務関係、日誌関係、会鑑関係、民間団体、官庁関係、その他

(3) 戦前・戦後一紙文書

1897～1966 年まで年度順

4 藤本蚕業（蚕種）合名（株式）会社蒐集機関 企業 団体 研究会および文献 雑誌 紀要 新聞 営業報告書

担当 小平千文 白澤治雄

藤本本家および藤本蚕種合名会社の史料内容は、共通点もあるが相違点も多い。史料整理は、最初は藤本蚕種合名会社関係史料、次いで藤本本家史料の順で行ったことから、その順序で概要説明をする。

(1) 整理前の所蔵状況

史料は、2階建て蚕室棟の2階の5部屋に保管されていた。保管の状況は、外壁はサッシ扉、廊下と部屋との境は破れた障子といった状態であったことから、長い年月のうちに貯まった塵埃をかぶった木箱や段ボール箱あるいはむき出しのままの状態になっていた。

(2) 整理方針と整理作業

まず蚕糸業関係史料と蚕糸業外史料とに大きく分類した。さらに、それぞれの内容を地域別にみるために国、県、上田小県（地元）とに分類した。これを前提に蚕糸業関係史料と蚕糸業外史料の内容を15大分類（表）にして整理した。

文献は原則として中性紙の袋には収納しないことにしたが、それ以外の研究論文、紀要、新聞や雑誌、営業報告書などはすべて中性紙の袋に収納する方法で行った。

(3) 史料概要

①A 蚕糸業行政機関史料（国）

農商務省(1881-1925)・農林省(1925-1978)蚕業試験場・蚕糸試験場・蚕糸局からの「蚕業試験場報告」や「蚕種に関する統計と資料」、蚕糸試験場彙報、『佐久良会雑誌』、交雑種調査記録が中心になっている。この史料群には、日本の殖民地となっていた朝鮮総督府勸業模範場蚕業試験場の蚕業試験場彙報や台湾総督府殖産局 養蚕所発行の台湾の養蚕記録や法規が含まれている。

②B 蚕糸業行政機関史料（県）

長野県以外の北は岩手県から南は鹿児島県まで32府県にわたる各府県の蚕業試験場報告を中心とした史料群である。

③C 蚕糸業関係史料（企業）

蚕糸公論社、関東蚕業社、上毛蚕報社、蚕糸情報社、蚕業新報社、鐘淵紡績（株）、片倉蚕業、帝国蚕糸倉庫（株）、帝国倉庫（株）、蚕業時報社、各種企業の1～1企業から発行された雑誌や営業報告。中でも定期購読雑誌『蚕業新報』が最も多く、1911（明治43）年8月の第200号から1941（昭和16）年1月の第573号（突然の終刊）まで、いくつかの号を欠きながら所蔵されている。

なお、営業報告書と株主名簿を主に行っている鐘淵紡績（株）史料は、H 蚕糸業以外の会社

(県内外) の分類として扱うべき史料群であったが、同類として整理してしまった。

④D 蚕糸業関係史料 (団体)

大日本蚕糸学会、蚕糸業同業組合中央会、全国製糸業組合連合会、蚕種協会 全国蚕種協会、(株) 日本絹業協会などから発行された会報、雑誌、通信、時報関係史料群である。創刊号は、1933 (昭和 8) 年 7 月創刊された全国製糸業組合連合会機関誌『製糸』だけであり、他の団体から発行されたものは、いずれも途中からのものである。欠号も多い。

⑤E 蚕糸業関係史料 (研究会)

(株) 日本蚕糸学会や協同組合全国蚕種研究会、日本農学会などから発行された雑誌、講演記録集である。『日本蚕糸学雑誌』は、創刊された 1930 年 2 月より 1966 (昭和 41) 年 8 月の第 35 巻 4 号まで比較的まとまった形で残されている。

⑥F 上田 小県蚕糸業関係史料

いわゆる上小地域に籍を置いている研究会、企業、団体から刊行された雑誌、冊子、営業報告書などをまとめた史料群である。上田蚕糸専門学校同窓会内にある蚕糸科学研究会から刊行された『日本蚕糸総覧』は、1930 (昭和 5) 年 5 月の創刊号から 1942 年 1 月の第 13 巻 1 号までほぼ全巻揃っている。なお、同会は 1939 年 1 月から日本蚕糸科学研究会と改称している。

猪坂直一生糸の国社から発行された雑誌『生糸の国』は地元発の蚕糸業紙として貴重本。蚕都新報社刊『蚕都新報』は、「蚕都上田」と呼称されるようになった時期や背景を理解する上で参考になる。他に、上田蚕種(株)の営業報告書、上田原原種製造所の事務報告、蚕糸雑誌(株)から刊行された『生糸』、上田蚕糸専門学校千曲会発行『蚕糸学雑誌』、信浪蚕業評論社刊『蚕業評論』などである。

⑦G 県内蚕糸業関係史料 (機関、団体、会社)

機関としては、県蚕糸課、繭検定所、蚕業試験場などの関係史料である。戦後最初の蚕糸業統計史料となる 1952 (昭和 27) 年『長野県蚕糸業統計』は、1965 年までである。現在入手困難なだけに貴重な統計史料となる。蚕業試験場交誼会刊の『蚕桑要録』は、1934 (昭和 9) 年 12 月の創刊号から 1942 (昭和 17) 年 8 月まで比較的まとまっている(1943 年 5 月終刊)。1949 (昭和 24) 年 8 月、『蚕糸技術』と題されて復刊された。県蚕業試験場から刊行された『長野県蚕業試験場報告』および『同痰報』も同様に比較的まとまっている。

この他に、組合製糸関係の史料として飯田町の天竜蚕糸社刊の『天竜蚕糸』と諏訪倉庫(株)営業報告書の一部もある。

⑧H 蚕糸業以外の会社 (県内外)

県内では、北信毎日新聞社や沓掛酒造(株)など、県外では、東武鉄道(株)などの営業報告書である。

⑨I 銀行関係史料 (県内外)

県内では、(株) 第十九銀行を中心に(株) 八十二銀行、(株) 信濃銀行、(株) 長野農工銀行などの営業報告書、県外では、(株) 安田銀行などの営業報告書である。

⑩L 新聞・通信・時報

「上田小県」、「県内」、「県外」と3分類した。「上田小県」では、現在では見られない『週刊上田新聞』、『千曲政経文化新聞』、『信越タイムス』、『上田通』、『観光信州』、『THE 3S WEEKLY サン・エス』、『民生新聞』、『信濃タイムス』など部数は少ないが見られる。同様の新聞として「県内」では『仏都新報』がある。「県外」では、蚕種取引先県や分場地の各県紙である。

⑪J 書籍等（蚕糸業関係）と K 書籍等（蚕糸業関係以外）、M 商報・月報、N 名簿・時刻表電話帳等、O カタログ・パンフレットについては、説明を省略した。

5 佐藤隆一家保存文献史料

担当 小平千文・白澤治雄

(1) 整理前の所蔵状況と整理作業

史料は、母屋とは2階建ての別棟2階に保存されていた。雨を受けたと思われる史料が相当数あった。2階の屋根に梯子をかけて少しずつ分けながら降ろし、軽トラックに積んで藤本蚕種合名会社史料整理場所である藤本工業の2階に収納して整理作業をした。

(2) 史料分類と特徴

藤本蚕種合名会社の分類方式を踏襲して行っただが、蚕糸関係の史料は意外に少なく、むしろ蚕糸業関係外の史料が多かった。分類は、「蚕糸関係史料」および「金融 会社史料」、「蚕糸関係外史料」の（雑誌）と（書籍）の4分類にした。

特徴的なことの一つは、『読書之友』・『読書世界』や『新刊図書月報』、『古本販売目録・読書と文献』など読書に関する雑誌や月報が多いことと、二つは、『県布達全報』や『県布達月報』、『県布達全書』という布達史料が整然と保存されていたことである。

(3) 史料概要

①A 蚕糸業関係史料

1888年創刊された『信濃蚕業雑誌』や田中芳男『養蚕図解』、1887（明治20）年11月創刊した『日本蚕業雑誌』、1892（明治25）年4月創刊の『大日本蚕糸会報告・大日本蚕糸』がある。いずれも欠号があり、創刊から終刊までは揃っていない。②B 金融 会社史料

銀行では、塩尻銀行と（株）第十九銀行、（株）長野農工銀行などの営業報告書。会社では信越石油（株）などの営業報告書である。

③蚕糸業関係外史料（雑誌）

近代上田小県地域における政治や経済、教育、文化などあらゆる分野にわたって知りうる情報を提供してくれる『上田郷友会月報』は190冊を数えているが、保存状態は激しい劣化、虫食い、奥付なし、表紙なし、などで閲覧には耐えられない状態になっている。

『上田市図書館報』は貴重本。

④D 蚕糸業関係外史料（書籍）

1880 年から 1888 年までの布達史料や『長野県治一覧概表 全』、『明治十一年長野県治一覧概表』は貴重本である。

なお、藤本本家及び会社関係の沿革については、『蚕都上田ものがたり』より引用して、付録として掲載してありますので、ご活用下さい。また、この史料整理を支えて下さった佐藤一助・勇二ご兄弟をはじめ藤本工業の皆さまに厚く感謝申し上げます。

付録 藤本蚕業（蚕種）合名（株式）会社の沿革

(1) 江戸時代の藤本一族

江戸寛文年間(1660 年代) に、初めてこの地で蚕種製造、販売に従事したのが、藤本善右衛門信之とされていますが、信之については詳しいことはあまり分かっていません。1781（元禄 3）年、息子の善右衛門信明（推定）の代には、「信、上、奥、武、相、甲の七カ国の同業者 間と武蔵国八王子に会同し、商売の権義を議定」⁽¹⁾したといひます。一九世紀初頭には、「信州種屋仲間のみ」で、神明講という同業者組合を結成し、この講には、上塩尻村だけでも 119 人が参加していて、佐藤善右衛門の名前もあります。⁽²⁾

藤本善右衛門昌信を初め上塩尻村の蚕種家たちは、自ら蚕種を製造販売するだけでなく、地元で製糸の技術を導入することでも貢献しました。19 世紀初には、京都に移出するまでになり、「ノボセ糸」と称されました。彼らの業績を称えた石碑が、同地区にある「信濃国露業頌徳碑」です。石碑には、1808（文化 5）年藤本善右衛門等 10 人が、上州から技術者を招いて近隣の子に製糸技術を伝えた旨が刻まれています。

父昌信の後、30 歳で善右衛門を襲名した保右は 1827（文政 10）年、「青白」の一種である「黄金生」を育成しました。「青白」と「黄金生」との関係については、「青白」の元は保右が育成した「黄金生」だといわれる、と書いています。この「黄金生」は、天保の飢饉前後よりの冷涼な気候に強かったため、1830~1870 年頃まで流行しました。彼はまた、1841（天保 12）年に『蚕かひの学』という挫蚕技術門を著わしています。

父保右の後を 1856（安政 3）年に受け継いだ縄葛は 1845（弘化 2）年に新品種「掛合」（「信」小 I かなす）を育成しました。この品種は、縄必と下之條村の中山重作とが計って、反蚕の雌蛾へ春蚕の雄蛾を掛け合わせたもので、「青白」とともに幕末明治初期にたくさん輸出された蚕種でした。

(2) 明治以後の藤本

幕末から明治初頭にかけて、海外輸出が急増したため、蚕種は高値をよびましたが、これが粗製濫造につながり、大いに信用を落とし、価格の大暴落を引き起こしました。こうした

事態を憂えて、善右衛門縄葛をはじめ塩尻村の蚕種家 56 名は、「妙びょう連」という組織を結成しました。総代の善右衛門縄葛は、横浜に出張して取引し、「伊太利亜人フハーケ及び仏国人テローロ等外人に信用を得て…父善右衛門縄葛が横浜港に売買なす処の産卵紙は現品を一見せずして（拝見なしと謂ふ）取引」(3)する程の信用を勝ち得ました。

1872（明治 5）年、明治政府は、より質の高い蚕種の海外輸出を効率的に進めるために、蚕種大総代制度を設けます。全国わずか 16 人の大総代の中に、藤本善右衛門縄葛も選ばれます。「蚕種製造人中行為誠実事業熟達」(4)したと、認められたからでした。

翌年、善右衛門縄葛らは、「妙虫少連」を均業社という販売会社に改組します。もっとも会社とはいっても、それぞれの独立採算でした。イタリア・フランスが、微粒子病を克服し、輸出が激減すると、均業社もいったん解散し、1884 年、新たに国内向けに蚕種製造する塩尻均業会社として出発します。社長には、一族の佐藤八郎右衛門（この名も襲名）が就きました。ここも規約で、「社員各自ヲシテ善良ノ蚕種ヲ製造販売セシムル」(5)とある通り、各蚕種家は独立していました。1877（明治 10）年、明治政府は殖産興業を目指して第一回内国勧業博覧会を東京上野に開催しました。長野県からの出品は、生糸や蚕種が多くを占めていますが、その中に鳳紋賞牌を受賞者には、善右衛門信汎と佐藤八郎右衛門の 2 人が含まれています。その後の内国勧業博覧会の上位入賞者にも、同族の佐藤尾之七の名が見えます。

蚕種家の多くは、金融資本にも関わり、塩尻銀行の創設に善右衛門信汎が参加し、国立第十九銀行や長野農工銀行の役員にも、名を連ねています。蚕種で得た利益は、土地取得にも使われました。藤本家に残る、百枚を超える地券や土地台帳、小作証書などにそれを見ることが出来ます。

(3) 藤本蠶業合名会社の発足と株式会社への変更

1905（明治 38）年、蚕病予防法が公布されますが、それは検査や器具、薬品などに多額の出費を強いるものでした。これに対応すべく、藤本家を宗家とする佐藤一族は、それまでの個々の製造販売から、共同出資して藤本蠶業合名会社を発足させます。中心となったのは、佐藤尾之七でした。ここに、初めて今日的な意味での会社が誕生しました(1908 年)。

1917（大正 6）年、一代交雑種を製造する目的で、上田蚕種株式会社が設立され、藤本蚕業の佐藤尾之七も参加しました（参照 ③）。1924（大正 13）年、藤本蠶業合名会社は、藤本蠶業株式会社に社名を改めました。この頃には、蚕種の風穴保存に代わって冷蔵庫が用いられるなど、いっそうの設備革新がはかられ、また一代交雑種の実用化が進むなど、近代的な蚕種製造が求められました。

化学繊維が発明されると、それへの対抗上からも、単に強壮であるだけでなく、糸ムラの少ない絹糸が求められました。そこで注目されていたのが外国蚕種と日本蚕種との掛け合わせである一代交雑種です。また製造量も、増加の一途を辿っていた時代でしたので、それへの効率のよい品種も求められました。生産を拡大した藤本蠶業は、分場と称して、早く桑が芽吹く屋久島や八丈島に委託して行うこともありました。

(4) 蚕都上田の衰退と藤本

深刻化する不況の下、1931（昭和 6）年、蚕糸業組合法が成立し、蚕種生産は国の管理下に置かれていましたが、それでも「毎年 3～4 割の余剰蚕種が生じ」（6）るほどでした。さらに大手製糸会社による蚕種の自社生産が、追い打ちを掛けました。従来「種場」として確保していた販売先を奪われることになったのです。

1932 年の藤本業の株主総会では、「資本家が既に蚕種を製造し特定組合に対し指定せる蚕種の配布する今日に於いて徒に従来より採り来たれる方針を固守するに於いては到底従来の営業状態を維持することを得ざるべし須く時勢の潮流に則せる営業方針によりこの難局に善処」（7）するとして、製糸業者の傘下に入る途を選択し始めます。

1940 年、藤本蠶業も藤本の名での蚕種生産を禁じられ、片倉製糸を中心とする日本蚕糸製造株式会社に加盟せざるを得なくなりました。戦争拡大とともに統制は更に強化され、1944 年、ついに上小地域での蚕種製造は、藤本蠶業のみとなりました。

（5）戦後の蚕種製造とその終焉

1946 年、敗戦の翌年には、藤本蠶業はじめ統制を受けていた蚕種家たちは、上田蚕種協同組合を発足させました。一刻も早い蚕種製造と販売を切望していたからです。マッカーサーによる蚕糸増産策も追い風になりました。社長には、藤本蠶業の佐藤嘉三郎が就任しました。

製造は、戦時下でも唯一生産を続けていた藤本蠶業が中心に請負、徐々に生産を増やしていきました。1947 年には佐久の協同組合も合併し、1950 年の製造量は、片倉、群是、鐘紡に続く第四位を占めるまでになりました。

1951 年になると、藤本蠶業株式会社は上田蚕種協同組合から脱退し、社名を藤本蚕種株式会社と改め、独自の製造と販売を再開させます。戦後の主な販売先は、個人の養蚕家から稚蚕の共同飼育を始めていた農協に変わりました。しかし化学繊維に押されての製糸業そのものの不振は慢性的なものとなり、養蚕農家も減少する中、1966 年、藤本蚕種株式会社は、終にその長い蚕種製造の歴史にピリオドを打ちました。そして 2008 年現在、塩尻地区には、ただの一粒の蚕種製造もありません。

しかし、近世から蚕種製造に関わっていた藤本家や藤本蚕業合名会社（創立時）には、多くの文書類や蚕種生産に使用した器具などが残されました。その多くは、市立博物館や市立図書館などに寄贈されましたが、未だ同家や同社には貴重な史料が残されています。それら藤本家の蚕種生産のあゆみを伝える史料を通して見えてくるものは、日本の近現代史そのものといっても過言ではないでしょう。

- （1）明治 33 年頃書かれたと思われる藤本家の沿革を著したもの。標題なし、和綴じ
- （2）『信濃蚕糸業史 中巻』（大日本蠶糸会信濃支会 1937）
- （3）前掲藤本家の沿革を著したもの （4）前掲『信濃蚕糸業史 中巻』
- （5）塩尻均業会社規約 （6）『上田小県誌 三』
- （7）一九三二年『藤本蚕業株式会社第七期営業報告書』